

## イザヤ書49章 「しもべにある栄光」

### 1A 主に選ばれたしもべ 1-13

#### 1B 地の果てまでの救い 1-6

1C 矢筒に隠された方 1-3

2C 無駄に終わらない訴え 4-6

#### 2B 国の復興 7-13

1C 蔑まれた方への礼拝 7

2C 帰還民の慰め 8-13

### 2A 忘れられていないシオン 14-26

#### 1B 廃墟から生まれる子たち 14-21

1C 主の産んだ町 14-15

2C 不妊の女の多産 16-21

#### 2B 諸国による世話 22-26

## 本文

イザヤ書 49 章に入ります。私たちはずっと、40 章から 48 章までに、主がご自分の民を、ペルシアの王キュロスによってバビロンから解放し、彼らをエルサレムに帰還させ、神殿を再建させることに用いられた話を見てきました。前回、48 章では、「主に愛される者が、主の喜ばれることをバビロンに行く。(14 節)」と語られていました。そして、この方が 16 節には、『「わたしは初めから、隠れたところでは語らなかつた。それが起こったときから、わたしはそこにいた。』今、【神】である主は、私をその御霊とともに遣わされた。」とあります。

ここから、父なる神と一つである方が、御霊によって遣わされるメシアの姿が預言されています。49 章から 57 章までに、しもべとして、地上で神に仕えられたメシアの姿が鮮やかに預言されています。地上で、へりくだって仕えられ、ひどい仕打ちを受け、ついにイスラエルの民のために、彼らの咎を受けられる姿として出てきます。しかし、この方は立ち上がり、よみがえるのです。それに織りなすように、ひどい仕打ちを受けてきたエルサレムに対して、廃墟となっているエルサレムに優しく語られます。目覚めなさい、あなたも立ち上がるのですと励ましているのです。

### 1A 主に選ばれたしもべ 1-13

#### 1B 地の果てまでの救い 1-6

1C 矢筒に隠された方 1-3

<sup>1</sup> 島々よ、私に聞け。遠い国々の民よ、耳を傾けよ。主は、生まれる前から私を召し、母の胎内にいたときから私の名を呼ばれた。

前にも、主が、島々に、遠い国々に呼びかけておられるところがありました(例:41:1)。それは、イスラエルのために来られた主が、彼らだけでなく、あらゆる国民を、地の果てに至るまで救われるご計画を持っておられるからです。

その名が、イエスです。ここでイザヤは、「主は、生まれる前から私を召し、母の胎内にいたときから私の名を呼ばれた。」と預言していますが、まさに御使いガブリエルが、名をもってこの方を神が召しておられることを、マリアに告げていました。「ルカ 1:31-33 見なさい。あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。」

<sup>2</sup> 主は私の口を鋭い剣のようにし、御手の陰に私をかくまい、私を研ぎ澄まされた矢とし、主の矢筒の中に私を隠された。

この方の口を鋭い剣のようにすると言われます。これは、神の言葉が人の心を刺しとおす剣のような存在であることを指しています。幼子イエスを見たシメオンが、マリヤを祝福してこう言いました。「ルカ 2:34-35 シメオンは両親を祝福し、母マリアに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れたり立ち上がったるために定められ、また、人々の反対にあうしるしとして定められています。あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くこととなります。それは多くの人の心のうちの思いが、あらわになるためです。」

しかし、主は剣のような言葉を、慎重に隠しながら語っていたという表現が使われています。「主の矢筒の中に私を隠された」とあります。これはどういうことでしょうか？主はへりくだった姿で生涯を送られました。貧しいナザレに住むユダヤ人の家庭に生まれ、そこで三十歳まで住み、それからガリラヤの片田舎で御言葉を語っておられました。それはとっても小さな働きのように見えながら、それでいて人々の間に広まり、そして今や国々にまで広まっています。すでに 42 章で、預言されていたとおりです。「イザ 42:2-4 彼は叫ばず、言い争わず、通りでその声を聞かせない。傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともなく、真実をもってさばきを執り行う。衰えず、くじけることなく、ついには地にさばきを確立する。島々もそのおしえを待ち望む。」

そのままの剣の言葉を語るならば、人々はたちまち滅んでしまいます。主は再臨の時には、その剣をもって、全世界の軍隊と戦われます。「黙 19:15 この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。鉄の杖で彼らを牧するのは、この方である。また、全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である。」主は人々が立ち上がることができるように、ご自身の栄光の完全な姿をお見せすることなく御言葉を語られたのです。

<sup>3</sup>そして、私に言われた。「あなたはわたしのしもべ。イスラエルよ、わたしはあなたのうちに、わたしの栄光を現す。」

主は、イスラエルをご自分のしもべとして選んでおられました(例:41:8-9)。諸国の民は、自分の願っていること、欲していることに合わせて神々を造ります。しかし、イスラエルは違います。イスラエルは、自分で神を造るのではなく、自分が神によって形造られた民です。したがって、神に対して自分はしもべであります。主は、イスラエルを選ばれて、これを愛し、これを贖うことによって諸国に対してご自分が神であることを明らかにされようとしていました。

しかし、これまで見てきたように、イスラエル本人が、その使命に応えていませんでした。バビロンの中にいる彼らは、神々に取り囲まれて生きており、埋没してしまって、自分はこれまでと変わりがなく生きていくのだと勝手にみなして、新しい神の働きを信じ、受け入れなかったのです。

そこで主は、イスラエルのために「しもべ」を与えられました。彼ら自身ではなく、彼らと一体になってくださる神に選ばれた者です。今読んだ 3 節は、イスラエルの民のことではありません。読み進めると、5 節以降を読めば、イスラエルを神のもとに集めるために、このしもべを造られたと書いてあります。イスラエルとは別の存在です。この方は、イスラエルのために来られて、イスラエルがその使命に応答するイスラエルとして回復するために、彼らの間に来てくださった方です。

イエスの父ヨセフが、ヘロデの手から逃れるためにエジプトに下りましたが、それは、ホセア書の成就であることをマタイは語りました(2:15)。けれども、ホセア書には、「11:1 イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、エジプトからわたしの子を呼び出した。」とあります。これはどうしても、エジプトからイスラエルを神が連れ出した時のことを語っているようにしか思えません。これは、イスラエルのメシアが、この民の歴史、その救いの中に入ってきてくださったことの表れです。主はこのように、私たちの間に入ってきて、その負の歴史から共に出発してくださる方なのです。

#### 2C 無駄に終わらない訴え 4-6

<sup>4</sup>しかし私は言った。「私は無駄な骨折りをして、いたずらに空しく自分の力を使い果たした。それでも、私の正しい訴えは主とともにあり、私の報いは私の神とともにある。」

主のしもべ自身が、このようなことを言われています。そうですね、イエスの言葉は一気に広まりましたが、しかし多くの群衆はイエス様から離れた。弟子たちでさえ、離れていきました(ヨハネ 6:60 など)。主が柔和に、へりくだって語っておられるからこそ、心を砕かない者たちは悟らないで離れていってしまうのです。愛の営みというのは、このように裏切られます。自分の力をいたずらに使い果たすような思いをします。まさに私たちの主イエスが、このところを通ったのです。

しかし、この正しい訴えは必ず神の前にあります。イエスの訴えは父なる神に届けられました。「ヘブル 5:7 キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました。」同じように、私たちも、無駄な骨折りのような思いをしたとしても、主が豊かに報いてくださるので、「ヘブル 6:10 神は不公平な方ではありませんから、あなたがたの働きや愛を忘れてたりなさいません。あなたがたは、これまで聖徒たちに仕え、今も仕えることによって、神の御名のために愛を示しました。」

<sup>5</sup> 今、主は言われる。ヤコブをご自分のもとに帰らせ、イスラエルをご自分のもとに集めるために、母の胎内で私を ご自分のしもべとして形造った方が言われる。私は主の御目に重んじられ、私の神は私の力となられた。<sup>6</sup> 主は言われる。「あなたがわたしのしもべであるのは、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのうちの残されている者たちを 帰らせるという、小さなことのためだけではない。わたしはあなたを国々の光とし、地の果てにまでわたしの救いを もたらす者とする。」

主のしもべは、一人一人、イスラエルの失われた羊を捜していきました。例えば、取税人ザアカイの悔い改めを大変喜ばれました(ルカ 19:10)。バルテマイという盲人の乞食が、「ダビデの子よ、私をあわれんでください」と言って叫び、イエス様は、「あなたの信仰があなたを救いました。」と言われました(マルコ 9:48, 52)。確かにイエスは、ご自身に神からの使命があることを知り、父なる神がご自身に力を与えられていたことを感じ取っておられました。そして、主はご自身が地上に戻られる時には、イスラエルをみな主に帰らせることを知っておられました。天の果てから果てまで、四方から選びの民を集める、と言われました(マタイ 24:31)。

そしてイスラエル人たちだけではありません。救いは国々の民にも向かっておられたのです。イエスが、宣教の旅の後期にシドンに行かれたり、デカポリス地方を通られたりしました。ローマの百人隊長にも癒しをお与えになりました。そして異邦人への宣教は、使徒たちが聖霊に突き動かされることによって、カイサリアの百人隊長コルネリウスを始めとし、異邦人に福音を伝えるパウロを選ばれたりし、主は地の果てまでの救いを意図しておられました。

そして、この無駄にも思える主の働きで、私たちにも救いもたらされています。ですから、私たちもキリストの使者として、同じところを通っているのです。無駄に思えるかもしれない宣教の営み、これを主は尊いとみなしておられ、私たちに力を与えておられます。

## 2B 国の復興 7-13

### 1C 蔑まれた方への礼拝 7

<sup>7</sup> イスラエルを贖う方、その聖なる方、主は、人に蔑まれている者、国民に忌み嫌われている者に、支配者たちの奴隷に向かってこう言われる。「王たちは見て立ち上がり、首長たちもひれ伏す。」

真実である主、あなたを選んだイスラエルの聖なる者のゆえに。」

主が語られているのは、そのしもべに対してであります。イエスに対してであります。この方は、人に蔑まれました。国民に忌み嫌われました。そして、支配者たちの奴隷となりました。十字架刑に処せられる時の、ヘロデ・アンティパスと、ローマ総督ピラトです。

しかし驚くことは、この方を神は、王たちが立ち上がり、首長たちもひれ伏す方にしていくということです。この方こそ、王の王、主の主です。ピリピ書 2 章には、キリストが十字架の死に至るまで神に従順であったので、「ピリ 2:9-11 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが膝をかがめ、すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」

### 2C 帰還民の慰め 8-13

<sup>8a</sup> 主はこう言われる。「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、わたしはあなたを助ける。わたしはあなたを見守り、あなたを民の契約とし、国を復興して、荒れ果てたゆずりの地を受け継がせる。

主は、イエス様の願いに答えられました。先に引用したヘブル書には、「5:7 キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました。」とありました。これは、主が死者の中からよみがえられたことを指しています。このようにして、主は死からこの方を救われました。

パウロは、ここのイザヤの預言を取って、コリント第二でこう言いました。「6:1-2 私たちは神とともに働く者として、あなたがたに勧めます。神の恵みを無駄に受けないようにしてください。神は言われます。「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、あなたを助ける。」見よ、今は恵みの時、今は救いの日です。」主がよみがえられ、今はすでに恵みの時、救いの日になっています。主は今、生きておられますから、今、この方に受け答えさえすれば、その救いの恵みは自分のうちに実現するのです。

そして、そのようにしてこの方を助け、見守られました。そして、「民の契約」とされたとあります。主が弟子たちと最後の過越の祭りの食事をされて、「これが、新しい契約のために流される血です」と言われて、ぶどう酒の杯を回されたように、イスラエルも国民として新しい契約の中に入る時が近づいているということでもあります。

そしてここからは、大きく時間が飛んで、主が地上に戻ってこられる時のこととなります。「国を復



興して、荒れ果てたゆずりの地を受け継がせる。」というところです。主がよみがえられてから、弟子たちに神の国について語られたので、彼らから、「イスラエルを再興してくださる時なのですか？」と尋ねられましたね。それは、ここから来ているのです。しかし、その時については、父なる神が定めておられることであり、今は、聖霊があなた方に臨まれると約束されました。

<sup>9</sup> わたしは捕らわれ人には『出よ』と言ひ、闇の中にいる者には『姿を現せ』と言う。彼らは道すがら羊を飼ひ、裸の丘のいたるところが彼らの牧場となる。<sup>10</sup> 彼らは飢えず、渴かず、炎熱も太陽も彼らを打たない。彼らをあわれむ者が彼らを導き、湧き出る水のほとりに連れて行くからだ。

主は、悪霊に捕えられている者たちを解放されました。しかし、御霊による解放だけではありません。再び来られる時は、文字通り、荒れ地に青草が生えて、羊を飼うようになります。そして、これまで受けてきた害は受けません、守られます。そこには、敵はおらず、むしろ周囲の民は彼らの移住と定住を手助けするのです。彼らに、憐れみの心が起こされるからです。

バビロン捕囚の人たちにとって慰めのことばとなったことでしょうか、しかし、エズラ記を読めば、周囲の民は憐れむどころか、敵対しました。これは将来を待たないといけないのです。

<sup>11</sup> わたしは、わたしの山々をすべて道とし、わたしの大路を高くする。<sup>12</sup> 見よ。ある者は遠くから来る。見よ。ある者は北から西から、また、ある者はシニムの地から来る。」

世界に離散しているユダヤ人のために、主が大路を整えてくださる約束は、これまでも何度か出てきました。当時の路は今のような舗装はされておらず、岩や石が多くありました。また山地を歩くのは至難の業です。けれども主は、それをまっすぐにしてくださいます。

その方角が至る所からであります。北から西から来ます。北はロシア、西は欧州でしょう。そして、「シニムの地」とありますが今のヘブライ語では、これは中国を表します。けれども意見が分かれて、エジプトの南のことを当時は指していたのではないかとされています。いずれにしてもエジプトの南であれば、はるか南方から、中国であればはるか東方から来るということです。

<sup>13</sup> 天よ、喜びの声をあげよ。地よ、小躍りせよ。山々よ、歡喜の声をあげよ。主がご自分の民を慰め、その苦しむ者をあわれまれるからだ。

主がご自分の民を慰められるとき、悩む者を憐れむ時に、天地が喜び踊ります。これは、44 章 23 節にも出てくる言葉であり、そこではイスラエルの民の罪が雲のように、霞のように拭い去れた時に、天地が喜び踊っています。これはすばらしい約束です。

アダムの時のことを思い出すのです。彼が罪を犯したから、地が呪われました。茨を生じさせる土地となりました。けれども、第二のアダムであるキリストが罪を取り除かれたので、今度は被造物が祝福されるのです。

## 2A 忘れられていないシオン 14-26

### 1B 廃墟から生まれる子たち 14-21

#### 1C 主の産んだ町 14-15

<sup>14</sup>しかし、シオンは言った。「主は私を見捨てた。主は私を忘れた」と。<sup>15</sup>「女が自分の乳飲み子を忘れるだろうか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとえ女たちが忘れても、このわたしは、あなたを忘れない。

主は、ご自分のしもべについて語られ、それをイスラエルと呼ばれましたが、実際のシオンは、その慰めの約束にも拘らず、打ちひしがれています。酷い仕打ちにあって、自らは廃墟となり、忘れ去られていると思っています。これまでも、何度も何度も、主の良いご計画に対して、失望していて、心が鈍くなっている彼らの姿を見てきました。

しかし、主はあきらめずに、彼らを慰められます。主は乳飲み子を持つ母親を例にとって、絶対にそんなことはないと言われます。まず、そんなことはしないとされます。いや、たまたま乳飲み子を見捨てる事件を見聞きしますが、人間の母親にはそんなことがあっても、わたしはそんなことはしないと宣言しておられます。

### 2C 不妊の女の多産 16-21

<sup>16</sup>見よ、わたしは手のひらにあなたを刻んだ。あなたの城壁は、いつもわたしの前にある。

これは、主が完全にシオンを守っておられる、救いは保障されているという約束です。「手のひらに刻んだ」という表現は、主ご自身も使われました。「ヨハネ 10:28 わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りはしません。」

そして、「あなたの城壁は、いつもわたしの前にある。」という言葉は私たちには、あまり心に響かないかもしれません。当時の城壁は、自分の生死を決めるものでした。そこに入らないと、外敵に襲われ、食や水に困るという死に近いものでした。ですから、城壁の前に主がおられるというのは、「自分の命を守るその境界線に、主がいつもおられる。」ということです。

<sup>17</sup>あなたの子どもたちは急いでやって来る。あなたを破壊し、廃墟とした者たちは、あなたのところから出て行く。<sup>18</sup>目を上げて、あたりを見回せ。彼らはみな集まって、あなたのところに来る。わた

しは生きている——主のことば——。あなたは必ず、彼らをみな飾り物として身に着け、花嫁のように彼らを帯に結ぶ。

廃墟となっていたエルサレムに、イスラエルの子孫が所狭しとやってくるという約束です。そして、エルサレムの住民が飾り帯をつけて、花嫁のようになることを主は約束されています。

<sup>19</sup> あなたの廃墟と荒れ跡と滅びた地は、今に、住むには狭すぎるようになり、あなたを呑み込んだ者たちは遠くへ離れ去る。<sup>20</sup> あなたが子を失った後に生まれた子らが、再びあなたの耳に言う。『この場所は私には狭すぎる。私が住めるように場所を広くしてください』と。<sup>21</sup> そのとき、あなたは心の中で言うだろう。『だれが私に、この者たちを産んでくれたのだろう。私は子に死なれた女、子を産めない女、捕囚のさすらい人であったのに。だれがこの者たちを育てたのだろう。私は、ただひとり残されていたのに、この者たちはどこから来たのだろう。』

やって来たイスラエル人の数は多すぎて、それでもっと場所を空けてもらいたい、つまりもっと大きな町にしてほしいと言っています。エルサレムとしては、「この人たちはいったい誰だろう？」と思っています。なぜか？あまりにも人の住まない期間が長過ぎたからです。けれども、離散の地でイスラエルの子孫が綿々と生き残り、それである時に一気に、ずっと後世の子孫がエルサレムに押し寄せてくるという預言であります。

この預言は、完全ではないものの、前世紀の始まりから今に至るまで成就していています。ユダヤ人がローマによって追放されてから、エルサレムはさみしい町になりました。ユダヤ人はわずかにいるだけでした。

しかし 19 世紀の終わりから、ロシアやヨーロッパを中心にユダヤ人が怒涛のごとくイスラエルに押し寄せました。そして 1948 年にイスラエルは建国され、その日にアラブ諸国がイスラエルを一気に攻め込みました。その時に、周辺の中東地域に長年、離散の民として生きていたユダヤ人が、それぞれの国によって追い出され、財産の没収がされました。85 万人いたといわれています。彼らが独立戦争の後から押し寄せて入ってきたのです。そしてソ連や東ヨーロッパが崩壊して、そこにいたユダヤ人が押し寄せて、イスラエルは帰還民の避難所として今も機能しつづけています。エルサレムの町は、遺跡の丘として残っていて全然おかしくないのに、そこに全く新しい世代の人々が住みついているのです。そして、このことが、イエスの再臨される時に完成されます。

## 2B 諸国による世話 22-26

<sup>22</sup> 神である主はこう言われる。「見よ。わたしは国々に向かって手を上げ、わたしの旗を諸国の民に向かって掲げる。彼らは、あなたの息子たちを懐に抱いて来る。あなたの娘たちは肩に担がれて来る。<sup>23</sup> 王たちはあなたの世話をする者となり、王妃たちはあなたの乳母となる。彼らは顔を地



に付けて、あなたを伏し拝み、あなたの足のちりをなめる。あなたは、わたしが主であることを知る。わたしを待ち望む者は恥を見ることがない。」

主は、離散した彼らが住んでいる国々で、その国々の指導者が全面的に後押しして、彼らの帰還を助けることを示しています。これも、主の再臨の時に実現しますが、彼らの歴史の中ですでにその兆しは起こっています。かつては世界を支配していた大英帝国が、バルフォア宣言によってユダヤ人の民族郷土の宣言をしました。王や女王の後押しがあって、帰還できたのです。

<sup>24</sup> 奪われた物を勇士から取り戻せるだろうか。捕らわれ人を横暴な者から救い出せるだろうか。  
<sup>25</sup> まことに、主はこう言われる。「捕らわれ人は勇士から取り戻され、奪われた物も横暴な者から奪い返される。あなたが争う者と、このわたしが争い あなたの子らを、このわたしが救う。<sup>26</sup> わたしは、あなたを虐げる者に 彼ら自身の肉を食らわせる。彼らは甘いぶどう酒に酔うように、自分自身の血に酔う。すべての肉なる者が、わたしが主、あなたの救い主、あなたの贖い主、ヤコブの力強き者であることを知る。」

これまでイスラエル人から奪っていた者たちは、主によって取り除かれます。そして、自分に争う者たちは主が争ってくださいます。エルサレムを虐げる者には、その虐げを本人に向けさせます。そのことによってご自身が力強い者であることを示されます。終わりの日には、エルサレムに攻めてくるすべての国々の軍隊を、イエス様が一気にご自分の口から出てくる剣でもって滅ぼされます。

この信仰を、私たちは持つ必要があります。私たちの前にはいつも、私たちの霊的財産を奪い取ろうとしている敵が待ち構えています。私たちがキリストにあって神に愛され、選ばれ、義と認められたという部分を、猛攻撃してきます。そこにしっかりと信仰を働かせ、真理の帯を締めて、信仰による神の義の胸当てをしっかりとつける必要があるのです。「ローマ 8:31-34 では、これらのことについて、どのように言えるでしょうか。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。<sup>32</sup> 私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか。<sup>33</sup> だれが、神に選ばれた者たちを訴えるのですか。神が義と認めてくださるのです。<sup>34</sup> だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていてくださるのです。」

次の章では、イスラエルがまだその罪によって神から離れてしまっているところから始まります。そして、その罪に対して、民の反抗に対して、耐え忍び、苦しみを負われた、主のしもべ、メシアの姿を見ます。